

仮設住宅で班会開催

知らない人同士だったのが班会を通して何でも話せる関係に



仮設住宅談和室での班会開催は話が尽きない

坂総合病院友の会



小幡さん(写真)は、自宅が2階まで浸水し、泥のかき出しに90日以上通っていたと話してくれました。

(血圧測定は坂総合病院看護師の
大和田絹子さん)

寒い中、班会お知らせのために、班長の大場さんは仮設住宅を廻ります。多賀城市山王市営住宅跡地応急仮設住宅には、津波の被害が甚大だった多賀城市明月・宮内・町前・高橋・山王地区などで被災した45世帯が入居していますが、17世帯が坂総合病院友の会に入会しました。

1月16日、この日は2回目の班会で、仮設住宅の談和室には、8人の会員さんが集まってきました。年間計画(班会メニューから)を決める予定でしたが、日常の会話が弾みます。「暖かくなったらラジオ体操をやってみましょうよ、仮設住宅内の交流にもなるし」と大場さんが提案。2月の班会は身体を動かす「タオル体操」にすることが決まりました。

「仮設は湿気が多いからなかなか布団もかわかないのよね」「〇〇さんがみえないから心配していたの」。家族のこと、仮設住宅での生活のこと、買い物のこと、食事のこと、そして自分の健康状態など話は尽きる事はありません。病気についてはどここの病院がとても親切だったとかの情報交換、坂病院の良いところ、改善すべきところも率直な意見もだされます。

「仮設住宅に住んでいても、班ができるまではそれぞれ知らない人同士だったのが、班会を通してお友だちになり、何でも話し合える関係が築けたことは何よりも嬉しいです。」と坂総合病院友の会副会長の山内マチ子さん。

大場さんは津波で自宅が全壊し、いまは更地になっています。それぞれが大変な被害を受けながらも、笑顔で話し合える関係はとても素敵な事です。被災した人同士だからわかりあえることもあるのかもしれませんが。仮設住宅には、畳が入っていないくて、とてもガマンできずに自分でいれたという会員さんもいました。何か不足しているものがありますか?の質問に、お布団や靴下があればいいですねと話していました。

1月17日は、阪神・淡路大震災から17年になりますが、神戸では街がきれいになっても一人暮らしの問題はいまも続いています。そんな中で、会員さん同士がお互いを気遣いながら、声掛けあって開催される“仮設住宅での班会”。とても大きな役割を果たしていると感じました。(取材 神馬 悟)